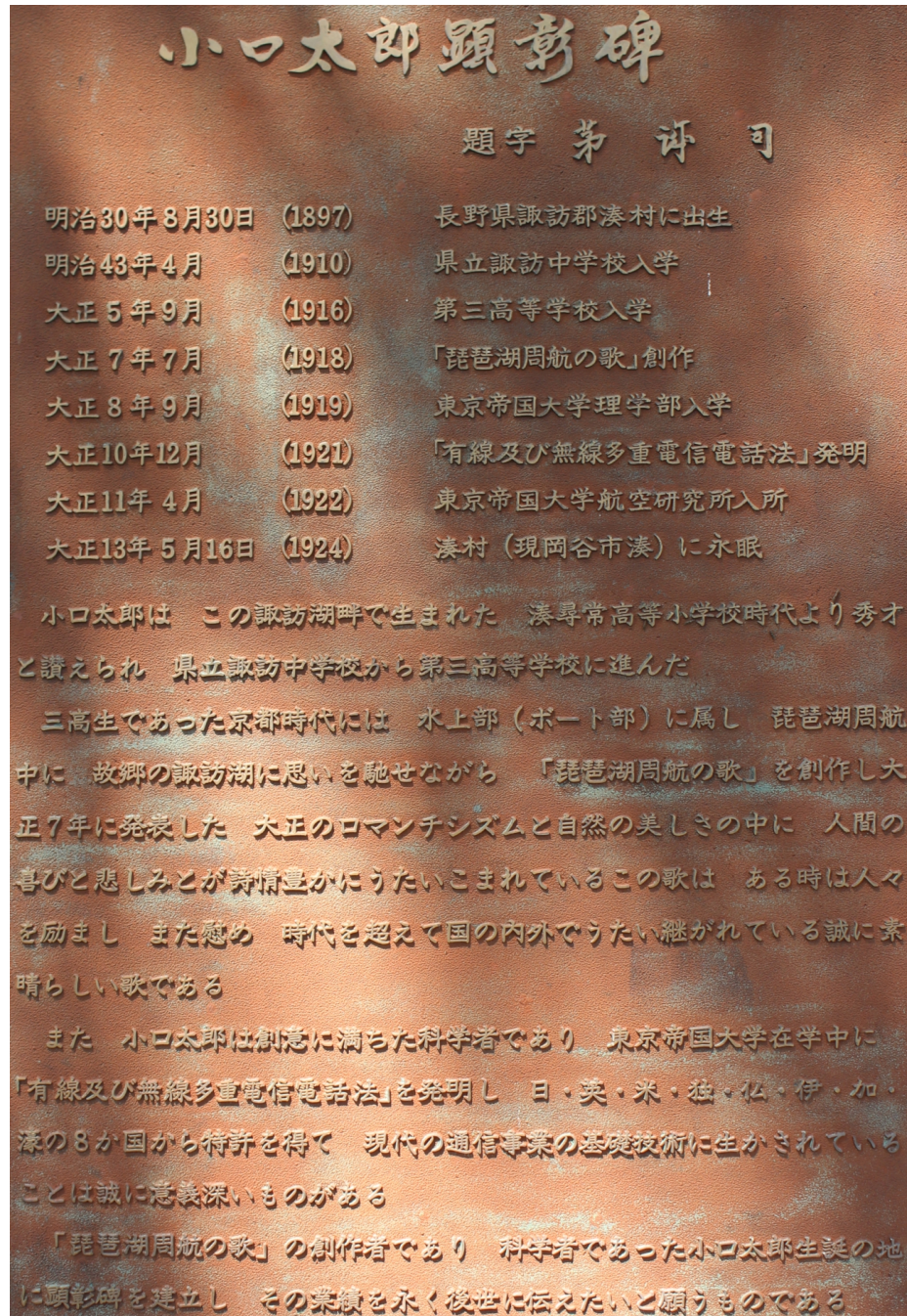




Motto (top) written by Seiji Kaya (茅誠司)

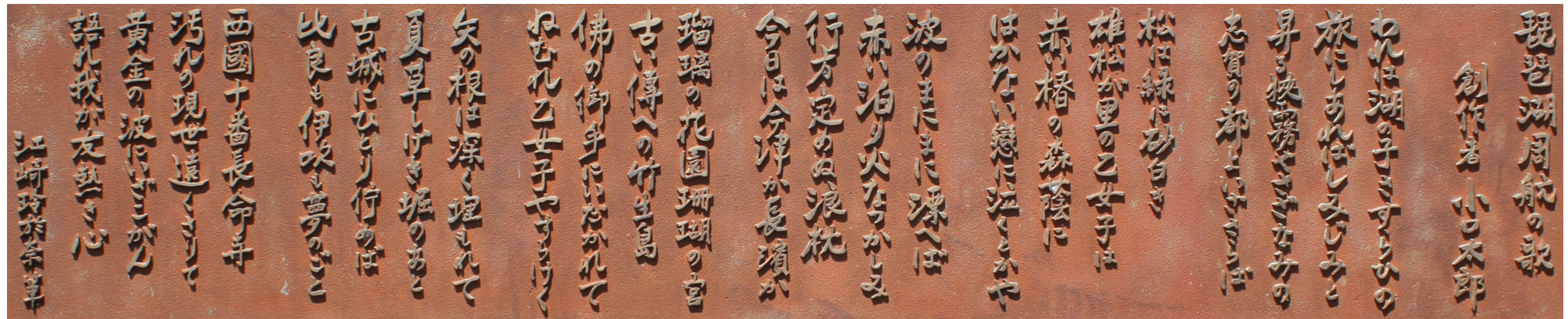


Statue of Taro Oguchi



South of Kamaguchi sluice gate in Minato Okaya city, Nagano prefecture

Biwako Syuukou no Uta (琵琶湖周航の歌)



[Lyric by Taro Oguchi](#) (Ink brush by Reona Esaki (江崎玲於奈))

琵琶湖周航の歌

琵琶湖疎水の取水口に突き出た三保ヶ崎に「われは湖の子」記念碑と歌碑がある。周航開始80年を記念して昭和48年（1973）に三高同窓生が建設したもので、記念碑には建碑の由来が記されている。

「・・・明治25年水上運動部を創設して、琵琶湖に漕艇を開き、翌26年4月有志21名初めて周航の業をなす。尔来80年、競漕は年々隆盛に赴き、周航は琵琶湖漕艇の神髄となり、湖上に艇を操るもの皆この岬より出でてこの岬に還える。或る時は力漕よく漕技を練り、或る時は湖上風物に詩情を養い、沿岸の史跡を訪ね人情を探り、艇を友にする者友情流露して心友堅く相結ぶ。

・・・小口太郎君等琵琶湖周航の歌を創るや、学生好んでこれを唱し、遂に一世を風靡して今日に至る・・・」

歌の誕生

大正6年6月、小口太郎ら一行は学年末（当時7月卒業）の慣例によって琵琶湖周航に出た。周航は小口が友人に送ったはがきから、次のような日程で行われたことが明らかになっている。

- 第1日 琵琶湖南端の大津三保ヶ崎を出発後、西岸沿いに北上し、雄松で宿泊。
- 第2日 北上して今津で宿泊。
- 第3日 今津から東進し竹生島を経て、東岸の長浜で

昼食。南下して彦根で宿泊。

第4日 彦根を出発して、長命寺で昼食ののち、南下し大津に至る。

「琵琶湖周航の歌」の原形ができたのは、2日目の今津の宿でのことである。小口太郎が作った詩を見て感心した中安治郎がクルーに紹介し、三高の音楽グループ“桜楽会”が当時よく歌っていた『ひつじぐさ』のメロディで歌って見たところ、歌詞にピッタリと合った。このとき、何番まで書かれていたかは明かではないが、今津滞在中ということからすれば3番まで、あるいは翌日の行程である竹生島のことを考えると4番まで完成していたのかもしれない。今日歌われている6番までの歌詞ができあがったのは、翌大正7年(1918)で、友人の助言も考慮して小口太郎が仕上げたと伝えられている。

ところで、歌詞の6番には「西国十番長命寺」と歌われているが、十番札所は宇治の三室戸寺で、長命寺は三十一番札所である。三十一番では歌にくいので、事実より語感を重んじて十番としたものらしい。長命寺港棧

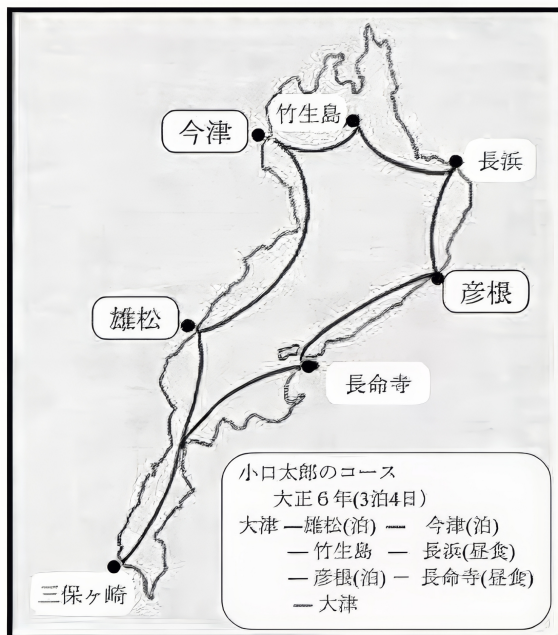
橋の後方にある歌碑には「黄金の波にいざ漕がん 語れ我が友 熱き心」とだけ書かれている。

「琵琶湖周航の歌」は三高生たちの間で歌われてきたが、一般にはあまり知られていなかった。しかし、加藤登紀子が昭和46年4月、「知られざる叙情歌」を集めて「日本哀歌集」というアルバムを発表、同年5月、そのなかから「琵琶湖周航の歌」と「知床旅情」をシングルカットして発売したのをきっかけに広く歌われるようになった。

作詞者 小口太郎

明治30年(1897)8月30日、信州諏訪湖西岸の湊村(現岡谷市湊)で生まれ、旧制諏訪中学(現諏訪清陵高校)に入学した。その人柄について、諏訪中学の同級生であった小口大次は次のように語っている。

「容姿は端麗、優雅、女性的であり、しもぶくれの顔立ちで両眼は細く、笑った時には糸を引いた様になり、両頬には可愛らしい笑窪が出来た。性格は温和、従順で、他と争う様なことは絶無であったが、胸中に自己の堅い



琵琶湖周航の歌のコース



小口 太郎

琵琶湖周航の歌

作詩 小口 太郎
作曲 吉田 千秋

6	5	4	3	2	1
西国十番 長命寺 汚れの現世 遠く去りて 黄金の波に いざ漕がん 語れ我が友 熱き心	矢の根は深く 堀もれて 夏草しげき 堀のあと 古城にひとり 佇めば 比良も伊吹も 夢のごと	瑠璃の花園 珊瑚の宮 古い伝えの 竹生島 仏の御手に 抱かれてく 眠れ乙女子 やすらげく	波のまにまに 漂えば 赤い泊火 懐かしみ 行方定めぬ 波枕 今日は今津か 長浜か	松は緑に 砂白き 雄松が里の 乙女子は 赤い椿の 森陰に はかない恋に 泣くとかや	われは湖の子 さすらいの 旅にしあれば しみじみと 昇る狭霧や さざなみの 滋賀の都よ いざさらば

信念らしきものを持っていた様に思われる」

大正5年(1916)9月、旧制三高の二部乙(理工農進学コースのドイツ語クラス)に入学、卒業後は東京帝国大学理学部物理学科に進んだ。長岡半太郎、田丸卓郎など教官7名、学生17名の集合写真が残されている。在学中に「有線及び無線多重電信電話法」を発明し数か国の特許を得た。特許42787号の明細書の「発明の性質及ヒ目的ノ要領」には以下の様に記されている¹。

「本発明ハ多数ノ送話機ヨリ同時ニ来ル多数ノ電信電流ヲ『ドップレル』効果ニヨリテ調子ヲ高メ以テ波形ヲ凝縮シ一箇ノ金属線回路或ハ一対ノ無線電話装置ヲ通シテ順次迅速ニ断片的ニ送り再ヒ同一ノ効果ヲ適用シテ波形ヲ膨張セシメ原振動ヲ再現スルノ操作ヲ同周期的ニ繰返シ以テ多数ノ原音声ヲ連続シテ同時ニ聞ク所ノ有線及ヒ無線多重電信電話法ニ係リ其目的トスル所ハ一箇ノ金属線回路或ハ一対ノ無線電話装置ニヨリテ同時ニ多数ノ電信電話ノ受送話ヲ行フニアリ」

大正11年(1922)年卒業と同時に、田丸卓郎教授の勧めで同大学の航空研究所に研究業務嘱託として入所する。徴兵延期を望んで「医学部へ再入学し細菌学を専攻する」と生家への手紙に記しているが、航空研へ入所することによっても徴兵を避けられると考えたらしい。しかし、12年5月の徴兵検査では甲種合格で、12月には松本連隊に入隊することになり、6月30日付で航空研究所を辞職する。この頃、光学顕微鏡の分解能を上げる研究に没頭し精神的、肉体的に疲弊していた。郷里に戻り近

¹この「発明」について情報通信に造詣の深い友人、甘利俊一氏の意見を求めたところ、次のような返事をいただいた。

「小口さんの提案についてはまったく知りませんでした。なるほど、この時代に時分割通信を提案したのはたいした見識です。しかし、技術はいろいろな要件がそろわないと実現しない。ひとつは、ドップラー効果で早回し効率的にできるかという問題ですが、もっと本質的には早回しをすれば、無限の個数の通信を送れるということです。これは、何かがおかしい。これが何であるのか、これはShannonの情報理論を待たなければ解決できなかった。Shannonの情報理論以降、時分割方式が脚光を浴びてきます。時分割と対になる、周波数分割がいち早く実用化されましたが、これは電波の周波数を変えることで、無線やラジオで使われたわけです。時分割には、やはり技術手段として早回しではなくて、符号化が実用には不可欠であったわけです。このような着想を喜びますが、そこからさらに一步で、通信の本質と早回しという技術の関係を考察する必要があった。それがないと、単なる思い付きで終わってしまうわけです。でも、着想はすばらしい。」

くの寺で静養がてら研究を続けた後、東京の精神科病院に入院し、大正13年(1924)5月16日、26歳の若さで亡くなった。表向きの死因は脳溢血とされているけれど、実際は自殺であった。兵役を苦にしてうつ病を発症したと推測されている

生家には、父・銀之助宛に寄せられた太郎の夭折を悼む便りが残され、その中には、航空研究所での指導者であった寺田寅彦の手紙もある。

「拝復 御子息様御永眠の御報に接しまして謹で哀悼の微意を表し度と存じます。此やうな事を申上げて宜敷かどうか分かりませんが、誠に珍しい有為の材をいだかれて御早世なさいました事は、吾々に取っても痛惜の至で御座いますが、何共致方な次第で御座います。御一統様御愁傷御落胆の程如何計りかと拝察致します。右御見舞のみ申し上げます。不悪御賢察を祈ります。不尽」 寺田寅彦 十三・五・二十一

作曲者は誰か？

寮歌集をはじめとする歌集には、「琵琶湖周航の歌」は作詞・作曲とも小口太郎、あるいは作曲者不詳と記されていた。昭和46年(1971)に加藤登紀子が歌って全国的に知られるようになり、改めて作曲者探しが行われた。旧三高OB堀準一、安田保雄らの調査の結果、吉田千秋という人物が作曲者であることが判明した。

作曲者 吉田千秋

明治28年(1895)2月18日、吉田東伍の次男として、新潟県小合(こあい)村(現在は新潟市)で生まれた。吉田東伍は歴史地理学者で、『大日本地名辞書』などの著作により知られている。千秋は明治40年(1907)4月、東京府立第四中学校(現都立戸山高校)へ進学、明治45年(1912)3月、同校卒業とともに東京農業大学に進む。



吉田 千秋

Water Lilies

ひつじぐさ

訳詩 吉田千秋

Misty moonlight, faintly falling
O'er the lake at eventide,
Shows a thousand gleaming lilies
On the rippling waters wide.

おぼろつきよの 月あかり
かすかに池の おもにおち
波間にうかぶ かずしらぬ
ひつじぐさをぞ てらすなる

White as snow, the circling petals
Cluster round each golden star,
rising, falling with the waters,
Moving, yet at rest they are.

雪かとまがふ はなびらは
こがねの蕊を とりまきつ
なみのまにまに ゆるげども
はなの心は なみだたず

Winds may blow, and skies may darken,
Rain may pour, and waves may swell;
Deep beneath the changeful eddies
Lilies roots are fastened well.

かぜふかばふけ そらくもれ
あめふれなみたて さりながら
あだなみのした そこふかく
もえいでたりぬ ひつじぐさ

しかし、翌年、結核に罹患し休学、ほどなく退学した。大正4年(1915)6月、祖父母のいる小合村に帰り療養生活を送る。この間、動物、植物、天文学、方言学、文学と、さまざまなことに関心を示した。また、近くの教会の集会に参加し、聖書や賛美歌に親しんだ。歌が好きで幾つかの楽器をひき、作曲の技術を独学で習得した。大正8年(1919)、24歳の誕生日を迎えて間もない2月24日に亡くなった。

千秋は、明治43年に『英語青年』誌で紹介された英詩「Water Lilies」^{†1}を訳し、大正2年に雑誌『ローマ字世界』に“Hitsuji-Gusa (ひつじぐさ)”として投稿した。そして、2年後、この詩に曲をつけ月刊雑誌『音楽界』の大正4年(1915)の8月号に発表した。

^{†1}詩 Water Liliesは英国の童謡集“Songs for our Little Friends”(Frederick Warne & Co.London,1875) 作者は(E.R.B)とイニシアルのみが知られている。英語学者 石川林四郎もこの詩を訳し、タイトルを“睡蓮”として明治43年に雑誌『英語世界』に発表した。ひつじぐさ(未草)の名前の由来は、未の刻(14時頃)に花を開くからといわれている。